

2022年3月27日大齋節第4主日

ヨシュア記5章《4:19-24》9-12節

コリントの信徒への手紙二5章17-21節

ルカによる福音書15章11-32節

大齋節も第4週に入りました。先週は、毎年北海道教区に送っている棕櫚の枝を収穫し、お送りしました。北海道教区の各教会の棕櫚の十字架が、わたしたちの教会の棕櫚が用いられていることを、赴任して初めて知りました。聖公会の教会間のつながりの深さと、その素晴らしさを改めて感じます。わたしたちの教会自身の棕櫚の十字架造りは、4月の第1火曜日午前10時半から行う予定です。

さて、本日の福音書は、有名な放蕩息子のたとえ話です。「ルカによる福音書」の神学的特徴といえる「悔い改め」という概念を、典型的に示しているお話といえます。しかし、本日は、使徒書の「コリントの信徒への手紙二」を中心に学びたいと思います。「新共同訳聖書」の小見出しでは「和解させる任務」とありますが、内容として、「新しく創造される」と復活に結びつく概念があるからです。

さて、この手紙は、「コリントの信徒への手紙一」と同じく、パウロがコリントというギリシアの都市にある教会にあてた手紙の一つです。パウロがこの教会にあてた手紙は、この「一」と「二」以外にもあったと想像されます。また、この「コリントの信徒への手紙二」は、一つの手紙ではなく、複数の手紙が合わせられて一つとなっているとも言われています。そのような中でこの手紙は、コリントの教会にパウロと敵対する人々が現れて、コリントの教会の人々とパウロとの間の信頼関係が、崩れかけた際に書かれました。

聖書日課の冒頭でパウロは、「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです」（2コリ5:17）と述べます。「キリストと結ばれている人」とは、キリストへの信仰を通して、その死と復活にあずかる人のことです。その人は同じように復活します。「だから」、その人は、「新しく創造された者」である、パウロはそう述べます。

この「新しく創造される」ということについて、パウロは、「古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」と続けます（2コリ5:17）。この「古いもの」という表現にある「古さ」とは、「新しさ」に対する「古さ」ではありません。「最初からある」という意味での「古さ」です。つまり、この世界の初めからある「古さ」が終わり、「新しいもの」が始まった、と語っているのです。「新しいものが生じた」とは、言い換えれば、新しい天地創造が起きたということです。パウロは、キリストを信じる人は、この新しい天地創造にかかわっていると考えます。これは、非常に規模の大きな救いの捉え方です。そして、これが、キリストの十

十字架と死と復活に、すべての根拠を置こうとする、パウロの信仰・神学の背景です。

18節でパウロは、「これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました」と続けます。この部分は、翻訳も解釈も少し難しい箇所です。ここにある「すべて」とは、主なる神様が創造された「すべて」です。つまり時間、空間、その中にある「もの」と「こと」すべてです。それらが、キリストを通して主なる神様と和解することとなったのです。だから、「キリストと結ばれている人」は、その和解のために、奉仕することをゆだねられていると、パウロは考えるのです。

18節だけではわかりにくいためか、パウロは、19節で説明を続けています。「つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです」。この箇所も、決してわかりやすくはないのですが、「和解」に「罪」という事柄が加わり、説明が広がっています。パウロが言おうとしていることは、主なる神様は、天地創造以降、人間の罪の責任を問わないようにしながら、人間が神様の方に立ち返ることを待ち望み、すべての被造物と和解しようと考えていた。そして、和解のために、人間が罪を犯さないように導き、罪の責任を問わないようにするために与えたものが、律法であった。しかし、その律法がかえって、罪をもたらす結果となってしまった。それゆえ、主なる神様は、ご自分が人間との和解を望んでいることを、イエス様の十字架と死と復活という出来事を通して、具体的に歴史において示された。そして、主なる神様は、その救いの教えが、時空を超えて、具体化され、宣教されることを、キリストを信じる者にゆだねたということです。

これら壮大な規模の救いに関する言葉を、パウロが、あらためてコリントの教会の人々に語る理由の一つは、冒頭に述べた通り、コリントの教会が、パウロのいない間に、パウロと敵対する人々によって、混乱させられていたからです。ただし、この「パウロと敵対する人々」、この人々がどのような人たちであったかは、正確にはわかりません。

パウロに敵対する人々とはだれかは明確にはわかりません。またそれゆえに様々に想像することができます。ユダヤ教の伝統を守ろうとするキリスト者たち、自分勝手な『聖書（旧約）』解釈を語る人たち、エルサレム教会から正式な認可を受けた正統派と呼べるような使徒たち、あるいは使徒とは呼べないとしてもイエス様と一緒に時を過ごしイエス様の思い出を数多く知っている人たちなどです。それぞれ、決して単なる悪意でパウロを批判したとは思えません。ただし、ひとつ言えることは、それらは、「肉に従って」キリストを知ろうとして

いる人々であろうということです。

本日の聖書日課が始まる前の節で、パウロは「それで、わたしたちは、今後だれをも肉に従って知ろうとはしません。肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません」（2コリ 5：16）と述べています。この箇所は、パウロの神学や宣教の根拠あるいはそのありかたを示す、大切な部分です。ただし、「肉に従って」という表現の内容は、いろいろな意味にとれます。人間的な考えでという意味、人間的な経験でという意味、イエス様との人間的なつながりでという意味など、解釈が別れるのです。しかし、そのいずれであっても、パウロは、そのようには自分はいないと述べているのです。つまり、人間的な何かに関連させてキリストを知ろうとしないと語っているのです。

そのようにパウロが考える第一に理由は（彼がイエス様にあったことはないという個人的事情は別にしても）、イエス様を通して実現した新しい天地創造ともいえる、規模の救いの出来事が、人間の思いを超えている事柄であり、主なる神様の一方的な愛の業であるからです。それゆえに、そこに人間的な思いを挟んで受けとることは、その計画を人間の営みに落とし、無駄にしてしまうことになるからです。逆に、その主なる神様の愛を受け入れ、イエス・キリストを通して、死を超えた恵みが約束されていることを自覚するとき、この世界においても、人間の思いを超えた歩みが始まるということです。

パウロの敵対者たちがどのような人々であったのか、正確にはわかりませんとさきに述べました。しかし、「肉に従って」の通り、人間的な思いがあるということから想像しますと、主なる神様の愛に応えるには、こうしなければならない、これをしてはならない、そのような新しい律法のようなことを、教えたのかもしれない。そしてそれゆえに、抽象的なことを語るパウロよりも、コリントの教会の人々は魅力的に思えたのかもしれない。あるいは、キリスト者となったことを大切な節目として、すべてを変えた歩みをしなさい、そのような言い方をする人々であったのかもしれない。これらの教えは、決して悪いことではありません。しかし、目標とそれへの歩み方が、人間的な事柄の範囲であるならば、新しい天地創造の規模で示された救いの出来事を、空しくしてしまうのです。

本日は、3月の最終主日です。教会の暦ではまだ大斎節の真ん中ぐらいです。しかし、わたしたちの住む日本では、年度が変わるという意味で、一つの節目です。今週の金曜日4月1日は、わたしが教えている神学校でも入学式です。今年も多くの学校で、コロナ禍の為、新しい年度の始まりが、今まで通りではない状態かもしれません。それでも日本という国において、3月から4月は、大きな節目の時期です。それらの節目を境に、新しい事柄が始まることを期待することも多いと思います。またその節目に際して、新しいことを志そうと思う人もい

ると思います。それらは決して悪いことではありません。本日の旧約日課でも、「彼らが土地の産物を食べ始めたその日以来、マナは絶え、イスラエルの人々に、もはやマナはなくなった。彼らは、その年にカナンの土地で取れた収穫物を食べた」(ヨシュア 5:12)にある通り、『聖書』には、荒野で主なる神様から与えられたマナ、そのマナを食べなくなり、カナンの地で取れたものを食べ始めるという、人間の体験可能な事柄が、新しい事柄へ向けたひとつの節目となったと告げる物語があります。「だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ」(ルカ 15:32)とある通り、回復・復帰、再会という人間の体験可能な事柄が、こちらも新しい歩みに向けた、ひとつの節目となったと告げる物語もあります。しかし、パウロがイエス様に見出した「新しさ」は、ひとつの節目を通して、次の新しさが始まった、ということではありません。単になくなったと思っていたものが戻った、ということでもありません。最初からあったものが、すべて「新たにされた」ということです。わたしたちが信じ、そして希望を置くのは、この新しさです。

年度が変わり、年齢も変わり、いろいろなことが変わってしまい、嘆くこともあります。また世界にある混乱や悲しみが、なくならない、変わらないことに嘆くこともあります。大齋始日の一週間前に始まった戦いは、いまだに終わりません。大齋始日の一週間後に起きた、東北地方中心の地震は、11年前の悲劇を思い起こすと同時に、新たな苦しみをもたらしてもいます。変わることに嘆き、また変わらないことにも嘆く、それが人間の思いといえるかもしれません。しかし、わたしたちが望みを置くのは、それらの人間的な嘆きを超えた、変わらない希望です。その基のなるのが、イエス様の復活です。

パウロは、本日の個所の最後で、このイエス様の復活に基に、真の希望を見出し、そのことを罪とその贖いに関係させ、その結果を主なる神様の義と結びつけて、和解という言葉を用いて、次のように結論で受けています。

「神と和解させていただきなさい。罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです」(2コリ 5:20-21)。様々な戦いと混乱、苦しみや悲しみがあるこの世界で、なぜ主なる神様との和解が必要か。それは、真の平和や慰めは、主なる神様のみが与えてくださるからです。それらの真の平和や慰めは、人間の考えや思いによって実現するのではなく、主なる神様の義に基づいて実現するからです。その根拠が、主イエス・キリストの復活です。今年もその復活をより豊かにお祝いできるように、大齋節の時をもう少し過ごしたいと思います。